

「ちゃんとグローブ持った？」

「持った！」

「水筒は？」

「持った!!」

お母さんがしつこく忘れ物がないかを確認してくる。三回目だ。六年生なんだからそんなへましないのに。

「今日の試合、絶対見に行くからね！」

「いいよ、どうせ試合には出ないんだから」

ぼくはそう言っただけで家を出た。足取りは淡々と、気分は悶々と。別に見に来なくていいのに。出られるかどうかどうかも分からないし、試合に出たところで、みんなをあつと驚かせるスーパーキャッチもできないし、外野の頭を飛び越えるようなホームランも打てないだろう。

夏の日差しはいつしか過ぎ去り、どこか秋を感じさせるような風の香り。半袖には肌寒く、長袖は動いていれば暑くなってきたりするような中途半端な気温。そんな中を歩いて十五分、学校のグラウンドへ。途中、自転車をこぐチームメイトが、声をかけてはぼくを追い越す。

今日はぼくたち六年生にとって最後の大会。その地区予選一回戦だ。だから、チームメイトの目はぼくを除いてキラキラしていた。最後だから悔いのないように精一杯頑張っ

て、ちたいて気持ちからそんな目ができるんだろ。ぼくだって、できるだけいい結果を残したいのはもちろんだけど。正直、いい結果を残せなければやめようと思ってる。

野球を始めてまだ一年も経ってないぼくは、大会でレギュラーになったことなんてない。他の同級生は低学年、遅くても中学年のころから始めている。練習量や経験の差は簡単には埋まらないし、それらを補える程の特別な才能なんてないから、そんな彼らからレギュラーの座を奪えるわけがない。だから、野球は小学生の間だけでいいと思ってる。

全員が集合してから会場の市民球場へ。コーチや当番のお母さんたちの車の中ではみんなゲームの話とかをしてリラックスしている。だけど、ぼくはそんな気分じゃなかった。ストイックとかそんなことでも、ゲームに興味ないというわけでもない。ただ、これから大会なんだから、少しは緊張感がないと、いいプレーなんてできないだろうと勝手に思い込んでいるだけだ。試合に出る出ないにかかわらず。だから適当に話を合わせ、会話が途切れても話題を作ろうとせず、押し黙っていた。会場に着くと、他のチームが既に試合をしていた。バックスタンドにある大きな深緑色の得点板を見た。四回裏で五対〇。勝敗は決まったな。少年野球はプロと違って七回までだが、この点差はなかなかひっくり返せないだろう。

ぼくたちは、球場の外で準備体操、ランニング、軽いキャッチボールをして準備。キャッチボールをしている時に、グラウンドの方から何回か歓声が上がっていた。見えないけど、どっちかのチームが点を取ったのだろう。

準備が終わって再び球場の得点板を見ると、信じられない数字になっていた。負けていたチームが五点差をひっくり返し、五対七で逆転していた。そのまま試合は動かず、ゲームセットの声が聞こえる。野球は最後まで何が起こるか分からない、とはよく言ったものだ。

前に試合をしていたチームがベンチから出てきた。何人かの選手が涙をぬぐいながら球場を後にしようとする様子を見ても、数時間後の自分がそうなるようには思えない。それはたとえ負けたとして、特に役に立つことも失敗もしないだろう自分に、そんな感情が芽生えるか分からなかったから。

前のチームと交代して、ぼくらは三塁側のベンチに入り、レフトの方で最後の調整を行った。ノックを受けていると、地面の感触がいつもと違うのを感じる。普段は小学校のグラウンドだから砂だらけだけど、今日の内野は暗い茶色の土、外野は天然芝だ。しかも外野は昨日の夜に降った雨で少しぬかるんでいる。今日の空も青空が少しだけ見える程度の曇り空で、雨に濡れた芝を乾かすには至らない。何球かエラーし

ちゃったけど無理もない。こんな不安定な場所じゃバウンドも変わってしまうから。

ベンチに戻ると、いよいよスタメン発表だ。監督からは最後の大会ということを念押しされると、みんなは程よく緊張感を持った面持ちになった。車の中では随分と上機嫌だったのに。

打順に従ってポジションと名前が呼ばれる。上位打線はいつも通りの名前が呼ばれていく。やっぱり多くの名前は呼ばれないと思っていたその時だった。

九番レフト、でぼくの名前が呼ばれたのだ。思わず声が上ずってしまったが大きな声で返事をした。

いつもスタメンで出ている五年生の竹田君たけだじゃなく、まさか自分が呼ばれるなんて考えてもいなかったから、変な緊張感で身震いする。

「いや、これは武者震いだ」

誰にも聞かれないような小さな声でそう言い聞かせた。

円陣を組んで全員の士気を高めた後、ベンチの前に並ぶ。普段は補欠だから後ろに並ぶのだが、今日はスタメンだから前の方に並ぶことになった。

大会ともなると、いろんなものが全く違う景色に見える。監督は「いつも通り」というけれど、胸の鼓動は早まるばかりだし、いつもとは違う緑のフェンスに囲まれた球場で、慣

れないぼくには無茶な話だ。

以前練習試合で相手チームと対戦したことはあるけれど、その時は、一部の上手なメンバーが活躍した程度で、スコアもエラーとかで六対〇で負けた気がする。

主審の「集合」という合図で、ぼくらは互いに向かい合う。自分たちに勝ったことがあるからなのだろうか、覇気というかオーラというか、自分にはない威圧感のようなのがあった。目元もなんだかにらんでいるようで少し怖い。

そんな中、ぼくらの最後の大会は幕を開けた。一回と二回の守備はエースピッチャーの服田君が無失点で抑え、ぼくの守備位置にボールが飛んでくることもなかった。ぼくも胸をなでおろしベンチへ向かう。

しかし、三回にその安心感は突如としてなくなる。先頭バッターがレフト前にヒットを放った。いきなり打球が飛んできたので少し動揺したけど、落したり、後ろにそらしてランナーを余計に進めたりすることがなくてほっとした。ひとまず落ち着くために深呼吸を一つ。

それだけで済めばよかったが、相手チームの猛攻は止まらない。次のバッターはぼくの頭上をはるかに越える打球を放った。ボールを追いかけて分かったのは、ぼくが全速力で走ったところで届かないほどの長打だということだ。それでも必死にボールを追いかけるしかなかった。

ボールだけを見ていたぼくの視界は何の前触れもなく地面に切り替わった。一瞬何が起こったか分からなかった。足元が少しぬかるんでいる場所ですまざったのだ。その間に打球を見失ってしまった。

ぼくは急いで立ち上がって、あわてて辺りをきよるきよる見渡すと、少し離れた場所に打球が落下したのが分かった。一目散にボールへ向かったが、取ったころには、一塁ランナーは生還、バッターも二塁を回っていた。ただただ焦りだけが募って、とにかく遠くへと思って必死にボールを投げた。しかし、焦ってやみくもに投げたボールは中継から大きくそれ、ようやく内野がつかんだころにはバッターもホームベースを踏んでいた。これで二点を先制されてしまった。

自分が大きなミスをしてしまったことはよく分かった。あの場面できちんと中継に返していたら、失点は最小限で済んでいたかもしれないのだ。

ドンマイという声の中には、「レフトしっかり！」と、怒鳴るような声が聞こえた。そんな声が聞こえてくると、気持ちの切り替えができなくなる。体がどこか縮こまってしまうのだ。

その心は、ぼくの打席にも影響した。バッターボックスに立つと、スタンドから母の応援が聞こえてくる。人一倍大きくて、甲高くて、温かい声だ。けれど、そんな声援をもらっ

でもぼくは、バットを振ることなく三振で終わった。

四回の守備に向かう時に自分は何をしているのだろうかという気持ちになった。せっかくスタメンで出られたのに、打つても守つてもいいところがない。監督がこんなぼくをスタメンで使ってくれたのはきつと温情だと思う。これが最後だからって。

そう思うと、自分が情けなく、悔しくて。空を見上げていないとどんどん悪い方向へ考えてしまいそう。でも、空を見上げたところで曇り空。心が晴れることなんてなかった。

四回も五回もぼくのところにはほとんどボールは来ない。来ても、ヒットを処理するだけで、全然チームの役に立ってなかった。打順も全然回ってこない。相手の投手の前にヒット二本と振るわない打線ではどうしようもなかった。

このままじゃ終われない。どこかでいいところを見せなきゃ。何でもいい。自分が少しでも活躍できたと言えるようなプレーをしたかった。

試合もいよいよ終盤の六回へ。頑張つて抑えてきた服田君も疲れが見え始め、フォアボールなどで二死満塁のピンチに。二対〇で負けているこの状況で一打出ると、逆転ができない可能性がぐつと上がる。何としてでも抑えなければならぬが、相手バッターは今日、すべての打席でヒットを打っているから、抑えられる確率は低かった。

本当は、外野にいるぼくなんかより、内野で守っているみんなや、なんとかギリギリで踏ん張っているバッテリーの方がもつとこの状況に苦しんでいるはずなのに。自分には取つて、内野に返球することしかできない。ランナーをアウトにできるレーザービームのような返球ができるわけじゃない。自分が無力なのは分かっていた。でも、自分にだって何かできることの一つくらいあってもいいじゃないか。一度でいい。自分にはできる。そんな風に言える何かがしたい。

そして、バッターは初球を捉えた。快音が鳴った瞬間に分かった。打球はレフトに飛んでいる。しかも大きく鋭い弧を描いている。

勢いよく後ろに下がったが、届くか分からない。そう感じている、それでも取りたかった。今度は打球から絶対に目をそらさない。いち早く落地点へ。

あと一步。いや、もう一步。落地点まであと少し。今度こそつかむんだ！

その思いはぼくを一瞬だけ宙に浮かせた。打球が落ちてくるジャストタイミングでグローブを開き、つかんだ確かな感触と飛び込んだ地面の衝撃が両方伝わってくる。

ぼくは芝生の上うつ伏せになっていた。左手にはつかんで離さなかったボールが確かにそこにある。

「やった！」

この手でピンチを退けた。起き上がって、やってやったぞと言わんばかりにグローブを高く天に突き上げた。

はつきり聞こえる。ベンチやスタンドから歓声が上がっているのが。「ナイスキャッチ」とほめる声がしていた。練習の時には絶対にできなかったスーパーカーキャッチ。ぼくは誇らしげにベンチに戻った。

その裏の攻撃はぼくからの打席だ。せっかく守備でいいプレーができたんだ。今なら悪い流れを変えられるバッティングが自分にだってできそうな気がしていた。

しかし、野球はそう上手くはいかない。相手ピッチャーも六回まで投げて疲労も出始めていた。なかなかストライクが入らない。またしてもぼくは一球も振ることなくフォアボール。ぼくは一塁へと向かった。

先頭バッターが出たというのとはとてもいいことなんだけど、どうせ出塁するなら自分のバットでという気持ちにはぬぐえなかった。

いやいや、切り替えなくては。勝つために自分ができることをやらなきゃ。かっこいいプレーは目立つことだけじゃないのだから。

結局、二者連続フォアボールでぼくは二塁へ。大きなチャンスができた。

しかし、チャンスを生かしきれない場面が続いてしまう。

二番、三番と倒れ、あつという間にツーアウト。一点でも取りたい。自分が生還すれば、反撃につながるかもしれない。こればかりはバッターの問題もあるので、自分にはどうすることもできないのががゆい。

そして、長打が出れば同点の場面で、四番の吉田君よしだに回ってきた。今日はヒットも打っているから、得点の可能性は十分にある。ツーアウトだから、バッターが打ったら全力疾走するだけだ。

そんなことを考えていた矢先、すかさず快音が響いた。二塁手の頭上を越える当たりはセンター前ヒット。ぼくは三塁を蹴ってホームベースへ駆けた。間に合うかどうかギリギリでも、止まるという選択はしなかった。ここですべきは、何としても一点を取ってチームを勢いづかせることだ。

息を切らして、走る。懸命に走っていたら、体は勝手に地面へと飛び込んでいた。確かに手でホームベースに触れたが、捕手もぼくの体に触っていた。審判の判定はどっちだ。

「セーフ！」

ぼくの方が早かった。チームメイトに見せつけるようにガッツポーズが自然と出て、ベンチに戻る。打てなくとも、ミスをして、ぼくにだって流れを変えるようなプレーができた。それが何よりも嬉しかった。その祝福はチームメイトもして

くれたし、見に来てくれたお母さんにも届いてるだろう。

バックスタンドの深緑の得点板には確かに白い文字で「1」と書かれている。それは吉田君の打点なのだが、ぼくの足でつかんだ確かな一点でもあるのだ。とっさの判断だったけど、勇気のある選択をしたことが功を奏した。

この一点が大きく、その後のバッターも続き、同点に追いついた。試合が振り出しに戻った。どっちが勝ってもおかしくない状況。でも、今なら負ける気がしなかった。それだけの勢いがチームにはあった。今朝、家を出た時には想像もつかないほど、今の自分は勝ちたいと思っている。勝利を心から信じたくなったのだ。

しかし、野球は最後まで何が起こるのか分からないのが常であつて。

七回表に三連続ヒットで失点し、勝ち越されてしまった。向こうも流れを変えるようなプレーをしてきたのだ。激しく燃えていたぼくらのムードは、そんな大きな流れの中では線香花火のようにプツンと消えてしまった。そんなぼくらの最後の攻撃は、あっけなくツーアウトに。

そして、最後のぼくの打席が回ってきた。ここでぼくが塁

に出なければ試合終了で負けてしまう。相手のベンチからは「あと一人」コールが聞こえてくる。でも、そんな簡単に終われない。今度こそ自分のバットで一発逆転をする時だ。

バッターボックスに入る前に「お願いします」と礼をする。全力プレーの誓いと、自分を鼓舞するために。相手のピッチャーは先ほどの打席の時と代わっていた。前のピッチャーとくらべて球威も増していることは見て取れた。

その初球。ぼくは思いっきりバットを振ったが空振り。ついでに入ってしまった大振りになった。監督からはコンパクトに振れというジェスチャーが見えた。そうだ、この場面は何としても塁に出ることが大事だ。ホームランで一打同点じゃなく、みんなでつないでサヨナラ勝ちまでもっていく。その先陣を切るんだ。

二球目。高めのボール球に手を出してしまい、あつという間にツーストライクと追い込まれた。冷静にボールを見極めなければ。必ずチャンスはくる。相手だって、ストライクが入らなければ三振にはできないんだ。そのストライクを狙って打つ。

三球目。低めに外れたワンバウンドの投球。ボール球でも手を出したくなってしまったのは、冷静になりきれしていないからだろう。相手のベンチからはさっきから「あと一球」コールがしきりに聞こえてくる。でも、それ以上に聞こえてくる

のは、チームメイトの「かっとばせ！」という声援だ。一、二打席時には聞こえなかった声援が消えない限り、諦められない。終われない。

四球目。きわどいコースの投球を打ったが、打球はファウルになった。手には打った時の感触が残っている。速い球に力負けているのが分かるくらい軽い痛みを感じた。自分に打てるのか？一瞬、そんな迷いが出てきた。本当なら打を出されてもおかしくない場面だった。それでもそうはされなかった。理由なんて分からない。だとしても、選ばれた以上は自分にはまだできることがあるんだ。やれるんだ。再びバッターボックスに戻り、大きく息を吐きだした。気合を入れなおして構えた。

五球目。ピッチャーが球を放った瞬間に分かった。絶好球だ！タイミングを合わせてぼくはバットを振った。当たった感触はさつきと変わらない。打球をちらっと見た。三塁に転がったポテポテの内野ゴロ。打ったら全力で走る。一番最初に知る野球のセオリーだ。走れば間に合うかもしれない。ぼくにできるのはそれだけだった。

ベースまであと少し。送球よりも先に間に合え！と、地面を全力で蹴り、頭から飛び込んだ。砂ぼこりが目に入ることなんて気にしていない。アウトか、セーフか。

「アウト！」

うつ伏せのままその声を聞いた。試合終了。結局、三対二で惜敗した。このまま地面から顔を上げずに涙を流したい気持ちもあったけど、グラウンドではてきぱきと動き、生き生きとプレーする。いろんな気持ちがかみあげてきても、ぐっどこらえて立ち上がる。うつむかないこと。それが大切なんだ。

ぼくらは初戦で最後の大会から姿を消すことになった。負けた後はもちろん悔しかったし、これで終わるのかと思ったり、寂しさもある。ただ、応援してくれた人たちから「よく頑張ったね」と言われると、その言葉をありのまま受け止められる気がした。結果はともあれ、ぼくらは全力でプレーをした。ぼくは、そのことに胸を張りたいと思った。

帰りの車でふと、球場の深緑の得点板を見たが、ぼくらの戦績は残っていない。でも、ぼくの心の中にはきちんと残っている。それだけで、ぼくの小さなプライドを作るには十分な代物だった。

曇り空から青空と呼べるようになったころには、球場の緑色のバックネットは見えなくなっていた。

冬の寒さが少し和らぎ、緑の草花がグラウンドの隅から生え始めるころ、ぼくらは小学生としての最後の練習を終えた。

ユニフォームに染み付いた砂の汚れはダイビングキャッチやヘッドスライディングの勲章。全力でプレーしたこと誇りだ。このユニフォームに袖を通すことはなくとも、あのプレーはこれから先、必ず何かにつながっていく。だって、少なくともあの瞬間は、ぼくのこれまでの人生で一番輝いていたから。

だからぼくは、中学生になっても野球を続けようと思う。